



Title	中国人2, 3, 4歳児と母親, および母親と大人他者の対話における中国語助数詞の使用
Author(s)	仲, 真紀子; 金, 敬愛; 陳, 萌華
Citation	千葉大学教育学部研究紀要. I, 教育科学編, 47, 1-6
Issue Date	1999-02-28
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/44737
Type	article
File Information	CKKK47_1-6.pdf



[Instructions for use](#)

中国人 2, 3, 4 歳児と母親, および母親と大人他者の 対話における中国語助数詞の使用

The use of Chinese numerical classifiers by two- to four-year-old
children and their mothers, and by the mothers and the adults

仲 真紀子・金 敬愛・陳 萌華

Makiko Naka Jin Jing Ai Chen Ming-Hua

仲は日本人の幼児と養育者(母親)の対話を分析し、(1) 幼児の年齢が上がるにつれ、母親は一般的助数詞「個、つ」の使用を減らし、特殊な助数詞「枚、本、杯」の使用を増やしてゆくこと、(2) 母親は幼児の言語レベルに応じたフィードバック(子「1!」-母「そう、1個ね」;子「1個!」-母「そう、1本ね」等)を行っていることなどを示した(Naka, in press)。母親はなぜ、一般的助数詞から特殊な助数詞へと助数詞を変化させるのだろうか。幼児は「個、つ」を過拡張して用いており、母親にとってはこの過拡張に付き合うことが最も効率的なコミュニケーションであるからだろうか。それとも「個、つ」はいわば助数詞の基礎レベルであり、示差性が意味をなさない幼児との対話においては、基礎レベルを用いるだけで十分なのだろうか。それとも「個、つ」から獲得を開始させることにこそ、何らかの効率性があるのだろうか。例えばしばらくの間、用いる助数詞に制約をつけておくことで、母親は幼児にとって「数+NC(助数詞)」の規則性を獲得しやすい状況を作っているのかもしれない。

今までに得た資料から考察するならば、母親による一般的助数詞の使用は、幼児の過拡張を反映しているという仮説だけでは説明されないように思う。母親はフィードバックによって、子どもの不適切な助数詞使用を訂正する。また、幼児は2歳をすぎると「個」を「つ」よりも多く用いるようになるが、母親は一貫して「つ」を「個」よりも多く用いる。さらに幼児の「個」の使用は増加してゆくが、母親は「個」の使用を減少させる。子どもに通じやすい助数詞を用いているというだけでは、母親の助数詞の変化は説明できそうにない。

また、示差性の伝達が意味をなさない幼児に対しては、基礎レベルの助数詞を用いるという説もあまり説得力がない。そもそも助数詞がコミュニケーションで担う意味は小さく(Matsumoto, 1981)、もしも「個、つ」が基礎レベルであるのならば、大人との対話においても「個、つ」はもっと用いられてよいだろう。限られた助数詞を用いることによって、「数+NC」の規則性を獲得しやすい状況を作り出すという説にも難点がある。もしも規則性を重視するならば、母親は「個」と「つ」の二種類ではなく、どちらか一種類だけを用いる方が合理的である。しかしながら、「個」と「つ」がほぼ同じ機能をもつ助数詞であることを考えると、「個」に加え「つ」を用いること(あるいは「つ」に加え「個」を用いること)と、「個、つ」に加え「枚」あるいは「本」といった第三の助数詞を加えることにはギャップがあるようにも思える。使用する助数詞を三種類や四種類ではなく、「個」と「つ」の二種類までにしておく、ということに意味があるのかもしれない。

本研究は、他の助数詞言語における母子の助数詞使用を調べることで、(1) 助数詞の使用には日本語の場合と同様、一般から特殊へという方向性が見られるのか、(2) 助数詞の使用は母子間でどの程度一致するのか(子が「個、つ」を過拡張して用いるために、母親も子に合わせて「個、つ」を多用する、という可能性を検討する)、(3) 母親の子に対する助数詞使用と大人に対する助数詞使用とに違いはあるのか(母親が大人に対しても「個、つ」を多用するのであれば、母親は子に対し、「個、つ」を基礎レベルとして多用している可能性がある)、(4) 母親は子どもに用いる助数詞に制約をつけているのか、といった問題を検討する。比較言語的にアプローチすることで、助数詞という、直接目で見ることのできない概念の伝達に関わる言語的入力について明らかにできないかと考える。

なお、日本の2歳児は多くの物事に「個」を用いるが、人を数える時にも「個」を用いるのだろうか。助数詞獲得の初期にあっても、幼児は生物と非生物に関する分類学的な知識を用い、生物に対する助数詞(「人」等)と

非生物に対する助数詞（「個，つ」等）とを使い分けているかもしれない。将来，日本においても比較資料を収集することを前提に，中国ではこの点も検討することにした。

調査1：中国人2，3，4歳児と母親，および母親と他者との対話における助数詞の使用

日本と同様，模擬的なおやつ場面を作り，そこでの事物のやりとりで産出される助数詞の種類と数を調べる。

方法

被験者：北京市内在住の2，3，4歳児とその母親または父親。それぞれ16組，17組，16組。

材料：(1) 事物材料：表1に示す。日本では細長い事物（ポッキーとスプーン），平らな事物（平らなクッキーと皿），立体的な事物（アメと山型クッキー），およびカップに入った水を用いた。使用された助数詞は，それぞれ「枚，本，個・つ，杯」であった。中国語では細長い事物，平らな事物，立体的な事物，コップに入った水に対し，それぞれ「支，張，塊・個，杯」を用いる（共著者でありインフォーマントでもある金敬愛（中華人民共和国大連出身）と陳萌華（中華民国台北出身）による）。だが中国にはポッキーは存在せず，また平らなクッキーと皿は「張」ではなく「個」で数えるなど，日本での材料をそのまま用いることはできない。そこでポッキーのかわりにストローを，皿と平たいクッキーのかわりに紙と餃子の皮を用いる。また実験を開始した後，山型クッキーは幼児に馴染みがないことが判明し，平たいビスケットを現地で調達し用いた。数は日本と同様，4ケずつである。(2) 指示用図版：各対象を図版に描いたもの。ただし平たいビスケットは山型クッキーとして描かれていた。

なお以下，中国語の助数詞は旧漢字で表記する場合もある。

表1：日本および中国で用いた材料*

	日本語	中国語(金)	中国語(陳)	中国語との互換性
アメ	個，つ	塊，個	個，顆	○
山型クッキー**	個，つ	塊	個	○
平たいクッキー	枚	塊	個，片	○
皿	枚	個	個	×
紙	枚	張	張	○
餃子の皮	枚	張	張	○
ポッキー	本	支(=枝)	支(=枝)	×
スプーン	本	支(=枝)	支(=枝)	○
ストロー	本	支(=枝)	支(=枝)	○
カップ	杯	只(=隻)，杯	個，杯	○

*日本では紙，餃子の皮，ストローは用いていない。なお「個」等一部旧漢字で表記する。

**実験開始後，中国人幼児に馴染みがないことが判明。平たいビスケットと取り替える。

***中国語(金)，(陳)の欄は，それぞれ共著者である金（中華人民共和国大連出身），陳（中華民国台北出身）による所数詞の標準的使用を示している。

手続き：日本と同様，実験は3セッションから成る。生じた助数詞を筆記し，会話を録音する。

- (1) 子に対する母親の助数詞使用：母親が幼児に，図版にある対象を描かれている数だけ取ってもらう。これを7つの対象について繰り返す。
- (2) 子の助数詞使用：(1)の終了後，取ってもらった対象を幼児に数えてもらう。
- (3) 大人に対する母親の助数詞使用：母親が実験補助者(大人)に，(1)と同様，対象を取ってもらうよう頼む。

結果と考察

筆記資料の分析結果を報告する。

各材料において使用された助数詞を表 2 に示す。どのセッションにおいても、すべての対象で「個」の使用が見られる。「個」は一般的に使用可能な助数詞であるといえよう。形状に関わる助数詞としては、「張」が紙や餃子に、「支、根」がスプンやストローに、「顆」がクッキーやアメに対して用いられ、また塊りを表わす「塊」、ひと掴みを表わす「把」など単位を表わす助数詞が事物の形状によらず用いられた。「只」は小動物に用いる助数詞であり、カップに用いられるのは奇異であるが、古くは同音異漢字であったもの(隻)が簡略化された際に「只」となったという説がある。いずれにせよ、日本語に比べ助数詞の種類は豊富で、同じ事物でも一般的助数詞を用いるか特殊な助数詞を用いるか、形状に注目するか単位に注目するかによって、さまざまな数え方が可能である。

「個」以外の助数詞を用いる場合、個人内で変動が生じる事例(子には「根」、大人には「支」を用いるなど)もよく見られた。

母親と子どもの助数詞の使用を比較すると、誤りも含め、子どもが用いる助数詞の方が種類が多い。中国語では事物の数を尋ねる際、「幾+NC+名詞?」(how many + NC + 事物名)の形で質問が行われ、答えは「数+NC+名詞」(数 + NC + 事物名)となる。そのため助数詞の省略は起こりにくく、代わりに不適切な助数詞がNCの場所に入るのかもしれない。

表 2 : 調査 1 で生じた助数詞の種類

紙	母 → 子 子 母 → 大人	張 張 張	個 個 個	塊 塊 塊	把 把 把	只 只 只	ba*
餃子皮	母 → 子 子 母 → 大人	張 張 只	個 個 個	塊 塊 塊	把 把 把	根 根 根	片 片 片
スプン	母 → 子 子 母 → 大人	支 支 支	根 根 根	個 個 個	把 把 把	只 只 只	杯 杯 塊
ストロー	母 → 子 子 母 → 大人	支 支 支	根 根 根	個 個 個	把 把 把	只 只 只	
クッキー	母 → 子 子 母 → 大人	個 個 個	塊 塊 塊	張 張 張		顆 顆 顆	片 片 片
アメ	母 → 子 子 母 → 大人	個 個 個	塊 塊 塊	張 張 張		顆 顆 顆	只 只 只
カップ	母 → 子 子 母 → 大人	杯 杯 杯	只 只 只	個 個 個	把 把 把	張 張 張	塊 塊 塊

* 意味不明の助数詞。「把」の誤りか。

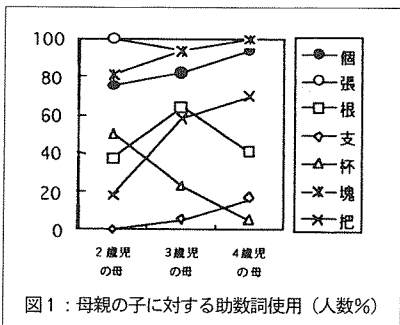


図 1 : 母親の子に対する助数詞使用 (人数%)

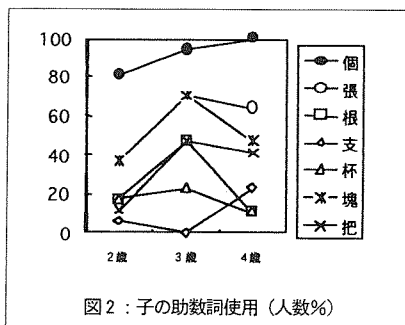


図 2 : 子の助数詞使用 (人数%)

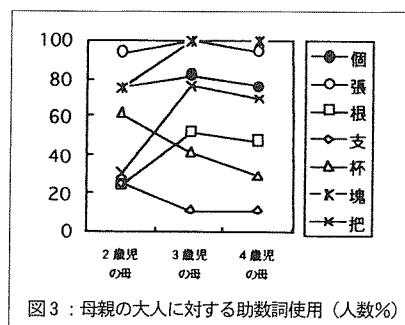


図 3 : 母親の大人に対する助数詞使用 (人数%)

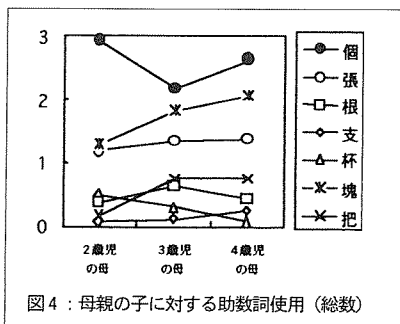


図 4 : 母親の子に対する助数詞使用 (総数)

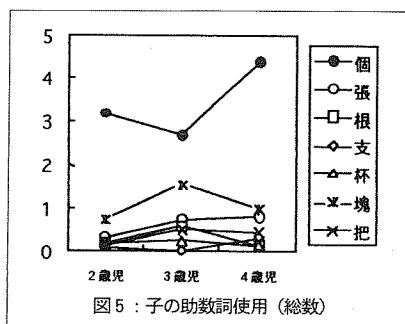


図 5 : 子の助数詞使用 (総数)

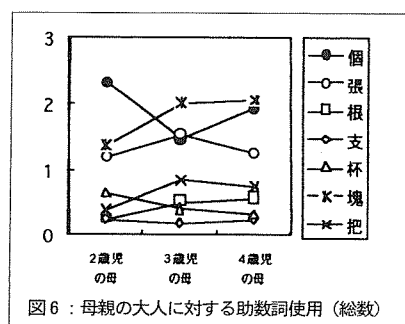


図 6 : 母親の大人に対する助数詞使用 (総数)

図1～3は、各セッションにおける各助数詞を使用した人数の割合を、図4～6は各セッションにおいて用いられた各助数詞の総数を示している。図2と図5（子の助数詞使用人数および総数）は、中国語においても一般的な助数詞「個」から習得が始まることを示唆している。図1（母親の子に対する助数詞の使用人数）と図3（母親の大人に対する助数詞の使用人数）は、母親が子に対しても大人に対しても「個」「塊」「張」を多く用いることを示している。人数の割合で見る限り、母親は対子ども、対大人で用いる助数詞を変化させてはいない。だが助数詞の総数（図4と図6）を見ると、母親は大人に対する時よりも子に対する時に、「個」をたくさん用いていることが分かる。以上より、子どもは「個」を多く用いること、「個」の使用に関しては母子間に対応が見られそうなこと、また対子どもと対大人では「個」の使用に違いが見られること（大人に比べ、子には「個」を多く用いる）が示されたといえよう。これらの特徴は日本語の場合と似ている。だが母子ともに初期から様々な特殊な助数詞を用いていること、特殊な助数詞については対子どもと対大人とで、使用にあまり差が見られないことなど、日本と異なる特徴もある。なお、特殊な助数詞の使用については、子どもがアメを「只」（「只」はカップに用いる）で数えたとき、母親が「幾塊糖？幾塊糖？」（幾=how many, 塊=NC, 糖=アメ）と繰り返し尋ね、子どもが「3塊糖」と答える事例などが見つかっている。日本語では子が誤った助数詞を用いた場合、母親が適切な助数詞を用いてフィードバックを行うことがあるが、このような現象に対応しているのかもしれない。

調査2：生物助数詞の使用

中国の幼児は生物に対する助数詞と非生物に対する助数詞とを使い分けているだろうか？ 将来、日本においても比較資料を収集することを前提に、中国語における資料を収集した。

方法

材料：着色された牧場風景の絵（A4サイズ）。牛1頭、猫3匹、鶏3羽、子ども2人、自転車2台、木1本が描かれている。これらはSnodgrassにより標準化された、誰が見てもそれとわかる対象物である。手続き：調査1終了後、続けて実施した。絵を提示し、描かれている対象を子どもに数えてもらうよう母親に依頼する。なお上述したように母親は「幾棵大樹？」（木は何本？）と助数詞を含めて尋ねることが多い。そこで幼児が母親から尋ねられて対象を数えた後、補足的に実験者が「樹有多少？」（木はどれだけ？）と助数詞を含めずに質問し、再度子どもに対象を数えてもらった。

結果

筆記資料に記載された助数詞をカウントした。

各材料において使用された助数詞を表3に示す。調査1と同様、すべての対象で「個」の使用が見られる。「個」は生物にも用いられる一般的な助数詞であるといえよう。母親が個々の動物に対して用いる「個」以外の助数詞は一貫しており、牛は「頭」、猫と鶏は「只」、人は「人、位」、自転車は「輛」、木は「棵」である。ただし「位」は大人を尋ねる時にしか用いられず、例えば描かれた人物が「小朋友（小さいお友達）」と命名された時には「個」だけが用いられた。

表3：調査1で生じた助数詞の種類

牛	母 → 子	個	頭	只	条			
	子 → 実験者	個	頭	只	条		塊 zhi*	粒
鶏	母 → 子	個	只					
	子 → 実験者	個	只					
猫	母 → 子	個	只	頭				
	子 → 実験者	個	只					
人	母 → 子	個	人	位				
	子 → 実験者	個			只	排		
自転車	母 → 子	個	輛	台	張			
	子 → 実験者	個	輛			只	肥	
木	母 → 子	個	棵	頭	輛	根	車	
	子 → 実験者	個	棵			根		把 支 張 頭

* zhi意味不明の助数詞「只」の誤りか。

母親と子どもの助数詞の使用を比較すると、調査1と同様、誤りも含め、子どもが用いる助数詞の方が種類が多い。特に人や牛に対する「只」(「只」は猫、鶏など小動物に用いる)の使用、木への「根」の使用(「根」は細長い物に使う)などが見られた。

なお、「只(ズ:一声または軽声)」、「支(ズ:一声。細長い物に用いる)」は「只」が軽声で発声される場合を除いては、同音意義語である。また「棵(カ:一声。樹木に用いる)」と「顆(カ:一声。アメ等に用いる)」も同音意義語である。文脈から推測して適切と思われる文字を当てたが、幼児の場合、混同や過拡張が生じている可能性は否めない。

図7~9は、各セッションにおける助数詞を使用した人数の割合を、図10~12は各セッションにおいて用いられた助数詞の総数を示している。図7と10(母親の子に対する助数詞の使用人数と総数)は、母親が2歳児に対しては「個」を多く用いること、子の年齢が上がるにつれ、より特殊な助数詞を使うようになることを示している。

図8と11(子の母親に対する助数詞使用人数および総数)また図9と12(子の実験者に対する助数詞の使用人数と総数)は、生物その他の対象についても一般的な助数詞「個」から習得が始まること、年齢が上がるにつれ、より特殊な助数詞を使うようになることを示している。子が母親に問われて対象を数える場合(図8と11)と実験者に問われて数える場合(図9と12)とを比較すると、幼児は母親と話す場合よりも、実験者と話す時に、より多く「個」を用いている。「幾+NC+名詞?」の質問枠組があれば特殊な助数詞を用いることができて、その枠組がなければ「個」が用いられるのだといえよう。母親は確かに子の助数詞使用を誘導しているといえるだろう。

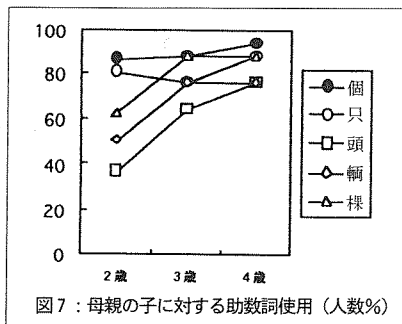


図7: 母親の子に対する助数詞使用 (人数%)

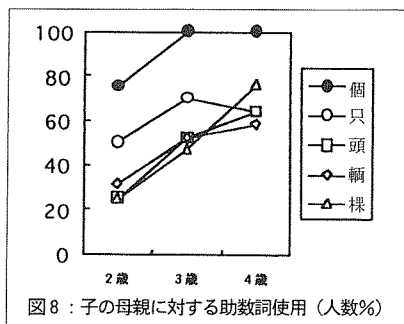


図8: 子の母親に対する助数詞使用 (人数%)

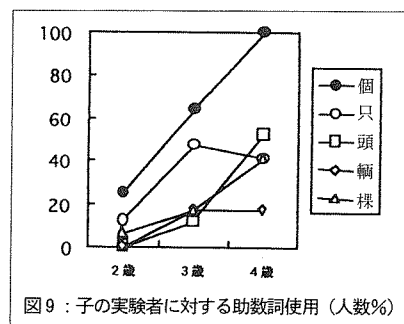


図9: 子の実験者に対する助数詞使用 (人数%)

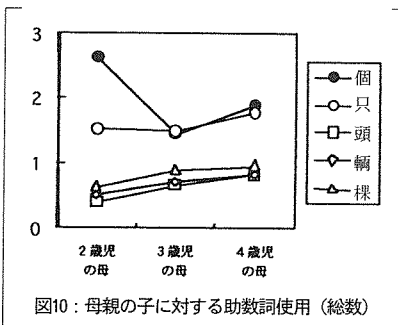


図10: 母親の子に対する助数詞使用 (総数)

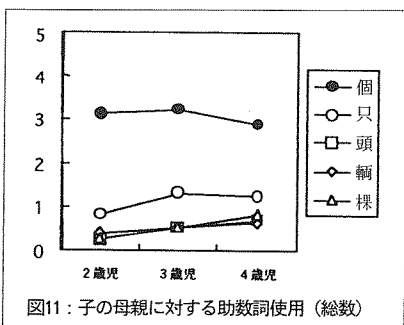


図11: 子の母親に対する助数詞使用 (総数)

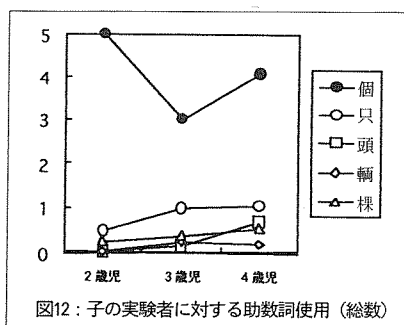


図12: 子の実験者に対する助数詞使用 (総数)

全体の考察

本研究は、中国語における母子の助数詞使用を調べることにより、(1) 助数詞の使用には日本と同様、一般から特殊へという方向性が見られるのか、(2) 助数詞の使用は母子間でどの程度一致するのか—母親の使用は子の助数詞過拡張を反映しているのか—、(3) 母親の子に対する助数詞使用と大人に対する助数詞使用とに違いはあるのか—母親は子に基礎レベルの助数詞を用いているのか—、(4) 母親は子に用いる助数詞に制約をつけているのかといった問題の検討を試みた。その結果、(1) 中国語においても、幼児はまず「個」を用いるようになり、特殊な助数詞の使用は年齢とともに上昇してゆくこと、(2) 「個」の多用という点では母子間の助数詞使用は一貫しているが、特殊な助数詞については子の方が(誤用も含め)母親よりも多くの助数詞を用い、母親は子の誤用・過拡張を反

映しているように見えないこと、(3) 母親は大人よりも子に対し「個」を多用しており、「個」は必ずしも基礎レベルだとは言いえないであろうこと、(4)「個」を多用し、子よりも少ない助数詞を用いているという点で、母親は子に対し用いる助数詞に制約をつけているように見えることなどが示唆された。母親はまず「個」その他の限られた助数詞を用いることにより、「数+NC」という規則をまず定着させるのかもしれない。

日本語では子どもに数を尋ねる時「何本(枚, 個, 杯)ある?」よりも「いくつある?」という表現がよく用いられる。だが、中国語では「幾+NC+名詞?」という表現が用いられることが多い。この表現は中国人幼児の「数+NC」規則の獲得を容易にしているのかもしれない。だが調査1, 2からも示唆されるように、中国語の助数詞は種類が多く、用いられ方も多様である。と同時に、対象によっては用いられる助数詞がかなり明確に限定される場合もあるようだ(猫, 鶏には「只」だが, 犬には「条」, 牛には「頭」だが馬には「匹」, 自転車には「輛」だが車には「台」など)。中国の4~6歳児を対象に助数詞獲得を検討した内田(1977)からも推察されるように、個々の助数詞の獲得は長い道のりであると予想される。実際、誤って使用している大人も見かけられた。ただ、今回の分析は実験時に書き取った資料だけを対象としている。対話資料、特に文脈や発話の隣接ペアの分析を行わなければ、上の検討事項を確定することはできないだろう。

付 記

本研究では陳玉玲さん、朱秀明さん、渡辺あきさん、生越清美さん、葵秀英さん他多くの方にお世話になった。陳玉玲さんには、北京市内の幼稚園を手配してもらい、また実験の最中は通訳を務めてもらった。朱英明さんはドライバーに徹して下さった。また渡辺あきさん、生越清美さんには、実験材料の準備、収集した資料の整理を手伝ってもらった。そして幼稚園の葵秀英先生ほか担任の先生方、園児、ご家族の皆さんが快く調査に協力してくださった。心から感謝している。

文 献

- Matsumoto, Y. (1985). Acquisition of some Japanese numerical classifiers: The search for convention. In *Papers and reports on child language development* (pp. 79-86). The Board of Trustees of the Leland Stanford Junior University.
- Naka, M. (in press). The acquisition of Japanese numerical classifiers by two- to four-year old children. *Japanese Psychological Research*.
- 内田伸子 (1977). 子どもは生物助数詞をどのように獲得するか—日本語・中国語母語話者の比較—. 立命館文学, 548, 77-114.